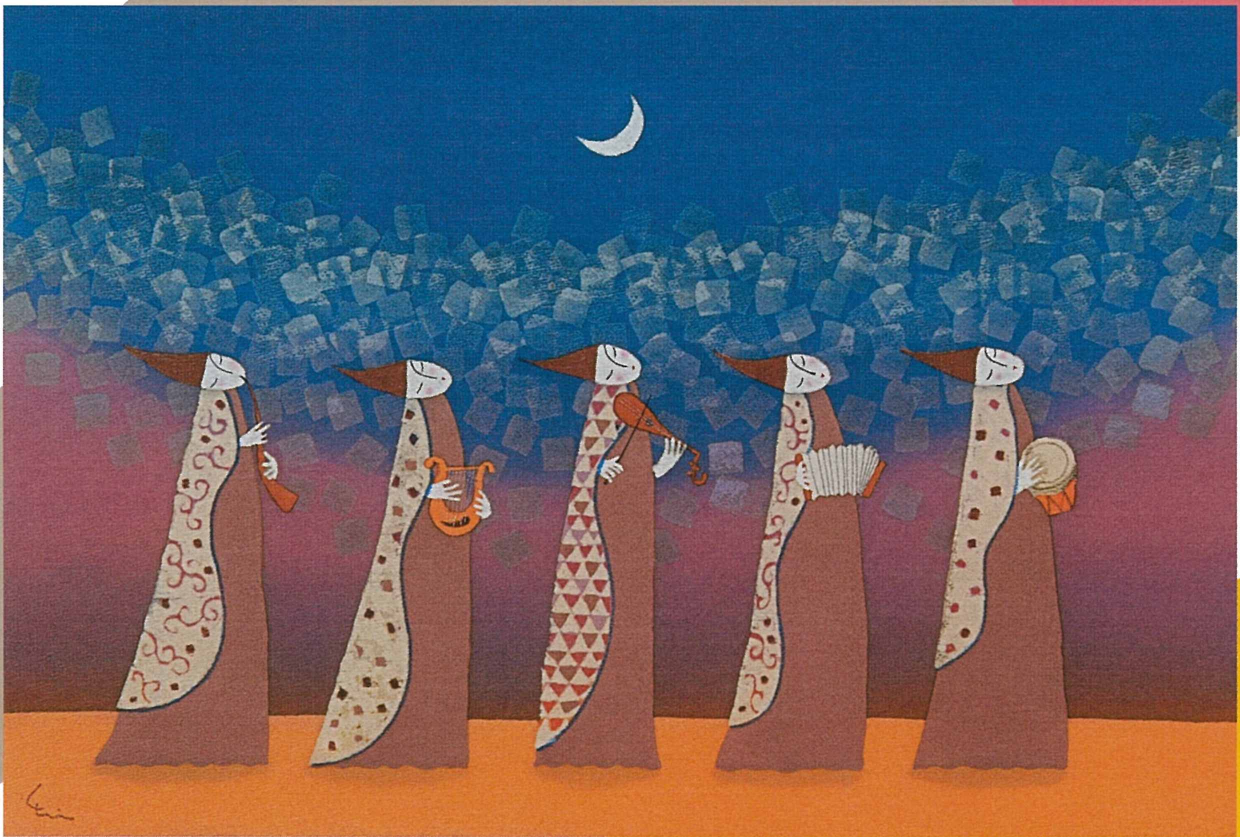
2008. 第17号

富山大学

医学部同窓会報



2008. 第17号

富山大学
医学部同窓会報

CONTENTS

4．　医学部長に就任して　医学部長　宮脇利男

6．　正念場　会　長　高田良久

〈特集　富山大学同窓会連合会設立〉

9．　富山大学同窓会連合会設立のご挨拶　学　長　西頭德三

11．　富山大学の永遠の発展を祈って
ー連合会発足にあたってー　同窓会連合会会長　中尾哲雄

12．　看護学科卒業生動向調査の概要報告　富山福祉短期大学　炭谷靖子

16．　掲示板
・理事の任期制導入の進行状況：常任理事と一般理事の会則変更
　および一般理事の選出
・今年度より医学部在学生を対象に海外留学生奨学金を援助する
　ことになりました
・医学部同窓会名簿への対応
・富山大学同窓会連合会が設立される

〈卒業生教授就任挨拶〉

18．　ご挨拶　高知大学血液・呼吸器内科（旧第三内科）　横山彰仁

19．　立命館大学教授就任のご挨拶
立命館大学理工学部化学生物工学科　西澤幹雄

20．　ご挨拶　埼玉医科大学国際医療センター病理診断科　村田晋一

〈新任教授挨拶〉

22．　ご挨拶　眼科学　林　篤志

23．　就任ごあいさつ　大学院医学薬学研究部法医学講座　西田尚樹

24．　私とハンセン病とのかかわり　歯科口腔外科学講座　野口　誠

25．　真の看護者の育成をめざして　看護学科基礎看護学講座教授　西谷美幸

26．　精神疾患の早期診断・早期治療の充実を
大学院医学薬学研究部神経精神医学講座　鈴木道雄

表紙　「祭りへ」　ロウケツ染　　加藤千代

染色工芸家。太平洋美術展・新人賞(1982年)、松吉賞(1984年)、太平洋美術会賞(1998年)受賞。各地工芸画廊をはじめ、日本橋高島屋(東京)、現代工芸藤野屋(栃木県佐野市)などで個展を開催している。また、1994年とちぎの美術女流作家100人展にも選ばれる。1999年銀座松屋にて個展を開く。いずれも好評を博す。栃木[蔵の街]音楽祭協力委員として地域文化活動にも貢献。縁あって本同窓会誌の表紙絵を1997年より依頼している。栃木県岩舟町在住。

27．特集“卒業生の今現在、そして将来”Part12
岡部源一（医学科　昭和62年卒）

〈特別寄稿〉
29．富山県立中央病院に赴任して
富山県立中央病院放射線科　放射線治療部長　野村邦紀

〈定年退官寄稿〉
30．退官します　成人看護学（慢性）　田中三千雄

32．第１回SUGINOKO学術講演会
金沢大学大学院医学系研究科感覚運動病態学（耳鼻咽喉科）　三輪高喜

34．第８回首都圏同門会の開催　杉山茂樹

〈訃報〉
35．故高橋研一先生へ　岩手医科大学薬学部臨床医化学講座教授　那谷耕司

36．平成19年度富山大学附属病院関連病院長懇談会議事要旨

37．平成19年度第26回医学部同窓会総会議事録

40．富山大学医学部同窓会会則

44．平成18年度会計報告・平成19年度収支予算案
平成19年行事報告・平成20年行事予定

47．第59回西日本医科学生総合体育大会

48．職掌分担・評議員一覧

50．医学部人事消息

51．編集後記

●会計からのお知らせ

●郵便局の民営化に伴う振込方法の変更について

医学部長に就任して

医学部長　**宮 脇 利 男**

昨年11月1日より、恥ずかしながら医学部長の大任を引き受けることになりました。1995年より、故郷富山の地で小児科教授として診療・教育・研究の仕事をさせていただいてから12年の月日が経過し、今では時代が様変わりし医学・医療をめぐってさまざまな課題が山積しています。

昨今、医師の初期臨床研修必須化による医師の偏在、とりわけ医師の都会志向、地方離れが進んでいます。全国の医学部・医科大学では、初期研修終了後の帰学者が従来の半分に減少し、人員不足が顕著となっています。勿論、富山大学も例外ではありません。医学部、大学病院の使命は、真に人間味性豊かな良医の育成、高度医療の地域への提供にあります。各教室では、なんとか、卒前、卒後教育の充実のための指導者確保、専門診療に携わることのできる人員確保に努めています。医学部、大学病院の今一つの大きな使命は、地域の医療機関への医師の派遣にあります。有難いことに、地域の関連病院で多くの本学卒業生が医師としての研鑽の場を得てきました。しかし、残念ながら、医学部、大学病院の人員を確保するため、関連病院への医師派遣に迷惑をかける辛い状況が出ています。

当然ながら、医学部、大学病院の医師不足により、医学研究にも影響が出ています。医学部、大学病院には日本のみならず世界をリードする臨床・基礎研究の推進が求められます。研究は決して楽なものではありません。しかし、研究を通じて初めて、患者の痛みに答えることのできる良医としての心を養うことができるものです。同窓会の多くのみなさんが経験されたことだと思います。臨床・基礎研究を問わず大学における研究体制で重要な役割を果たして来たのが大学院生です。大学院生の減少を危惧しています。

良医および医学研究者の育成には、医学教育が大切であることは言うまでもありません。医学教育の改革が叫ばれ、膨大になった医学的知識の伝授のスリム化に加えて、問題解決型

授業（PBL、Problem based learning）が導入されています。最近、若者の科学する心の喪失が問題視されています。難関を突破していわば理系の医学部に入った医学生の中にも見受けると感じるのは私だけでないでしょう。「科学する心」がなぜ若者から失われつつあるのでしょう。それは、科学技術が生活の隅々に浸透し、生活において不自由さを感じない、充足している、飽満の時代の産物でしょうか。確かに、冷暖房の完備した生活環境や車社会は四季の変化を感じさせなくしました。20世紀的な「科学する心」は、必要性は勿論のこと自然や生命に対する好奇心から生まれたものです。少子高齢化にあって、がん、難病、生活習慣病など医学・医療において解決すべき、挑戦すべきことが沢山あります。

「沈黙の春」の著者、レイチェル・カーソンは「センス・オブ・ワンダー」の中で、「わたしは、子どもにとっても、どのように教育すべきかを悩んでいる親にとっても、『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要でないと固く信じます」と述べている。自然の中にある、美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はる感性を育むためには、子どもと一緒に自然を探検し、発見の喜びに胸をときめかせることが大事と言っている。医学教育も通じるところがあるかもしれません。医学教育に多大な貢献をした内科医のオスラーが、「学生に対して教官の個人的影響力のない教育システムは冬の北極みたいものである」と言ったそうです。学問とか研究はある意味では水物、患者さんからどのように教えられ、感動を与えられ、元気をもらい、研究をどのように関心をもち、今日あるかの自己体験を、学生と積極的に接し伝授することが教官にとって今求められていることかもしれません。

富山大学として統合化されて２年目、共通教育を他学部の学生と一緒に五福で行うことが模索されています。他学部の学生と交流し、他分野のことにも理解を拡げることは、医師として巣立つには有用なことに違いありません。文部科学省は、医学部・医科大学への帰学者を増やさないと、地域医療や高度医療・医学研究の推進に支障が来ることを認識し、来年度には都道府県域、大学間を越えた医療人育成の連携を確立するための「地域連携型高度医療人養成推進事業」の予算化を目論でいます。富山大学もその中心的役割を担いたいと考えています。

北アルプスなどの人々を魅了する山々には広い裾野が広がっています。我が医学部、大学病院が、地域、全国、国際の中で光る存在となるには、若い力が欠かせません。困難な時代にありますが、教官一丸となり、母校富山大学医学部が底力をつけ、魅力あるものとなるよう、努力いたしたいと思います。

同窓会のみなさまには、今まで以上にご支援を賜りますようお願いいたします。

正　念　場

会　長　**高田良久**

2007年の首都圏同窓会は横浜で行われた。講演は東京の町田市民病院整形外科部長として活躍中の横山一彦氏（第２回生）、埼玉医大の病理の教授になられた安田政実氏（第７回生）の二題。二題とも、本学卒業生が今やそれぞれの分野の重鎮として働いていることを余すところなく伝え、深い感銘を受けた。

会場を中華街に移しての懇親会では、名刺の細かい字をお互い眼鏡をずらして見ながら、「親父がやっていたことを自分もやるようになるとは」と笑いあった。

学生時代の仲間といるから気は若やぎ華やぐのだが、視力は冷たく老年に差し掛かってきた現実を突きつけてくる。

次回の幹事を我が栃木県の浅井秀実氏（第３回生）が引き受けてくださった。文字通り首都圏の広がりとなっていくのを感じ心強い。

今度富山大学第一内科の教授に就任された戸邉一之先生も千葉県野田市のご出身で、首都圏同窓会のことをお話したら大いに関心を寄せられた。戸邉先生は、開成－東大の超秀才だが冷たい人ではない。むしろ開成運動会や開成祭で印象的な、競技にも展示・演技にも運営にも、全身全霊で打ち込むpureな熱い心を持ち続けておられるお方と拝察する。さらに、先日宇都宮で行われた糖尿病シンポジウム（日本糖尿病協会主催）の講師、JR東京総合病院の山下滋雄先生（福井医大卒。東大第三内科、糖尿病・代謝内科OB）によれば、

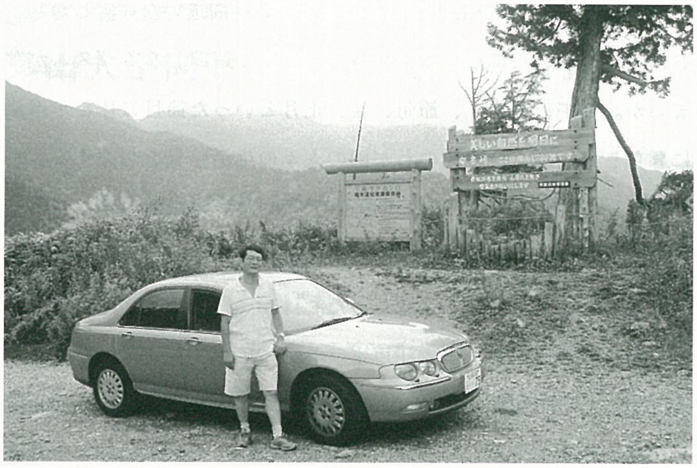
「戸邉先生の危機管理能力はずば抜けていて、教授回診の際には何度となく助けていただいた」

とのことだ。新教授の感覚知力人情にますます期待が高まる。なにより小林先生が会長を務められた糖尿病学会にいらして、すっかり富山が気に入られたというから嬉しいではないか。栗本副会長（第2回生）が表敬訪問したところ、早速特別会員になっていただけた。首都圏同窓会の輪も富山大学医学部同窓会の輪もさらに広がることだろう。

その戸邉先生の教授就任祝賀会が９月７日、富山大学同窓会連合会設立総会が10月６日で、この秋は二度の富山詣となった。

９月のときは台風による大雨で上信越道が通行止めとなり長岡を回った。長岡から上越にかけての北陸道はまだ中越沖地震の復旧工事中、路面は波打ち50km／h規制、自然の猛威に被災地の同窓生諸氏のご苦労を思った。

帰りは飛騨高山に立ち寄り、安房、松本、三才山トンネルを抜けて東部湯の丸、上信越道というご苦労さんなルートをとった。41号線神通峡や高原川沿い、安房峠、梓川沿いの158号線は何時通っても気分がいいし、高山の安川通りにある小さな和菓子屋で秋の一時期しかでない『栗きんとん』や、上三之町の味噌屋で関東ではあまり見かけない『赤味噌』を求めるのも楽しみの一つだ。信州上田では『発芽そば切り』なる逸品を供する蕎麦屋も見つけた。ゆっくり進むと、心和む伝統の味に出会うことができる。



2007年9月　安房峠　標高1,780mにて

この旅で77,777kmとなった愛車との写真をご披露しよう。

同窓会連合会設立総会では、各学部同窓会長が挨拶を求められ、私は

「歴史ある富山大学の中で一番の若輩者である医学部同窓会だが、本学発展を思う気持ちは同じく熱い。最大限の努力をしたい」

というようなことを申し上げた。

東大も同窓会連合会を結成したそうだ。また東大ブランドの日本酒だかワインだかを開発して売り出し評判になっているという。本学も顰に倣って各学部の力をあつめた何かを生み出せると素晴らしい。

高岡高等商業学校として発足してから富山大学経済学部にいたる変遷をもつ経済学部同窓会は『越嶺会（えつれいかい)』、工学部は『仰岳会（こうがくかい)』と会名を持っている。我が医学部同窓会も変遷を包括するためにもいよいよ会名がほしいところだが皆様のご意見はどうだろう。

ところで、高血圧や高脂血症の講演会でよく話題に上るから、『沖縄26ショック』をご存知と思う。1985年に男女の平均寿命が世界一となった沖縄県で、2000年、男性の平均寿命が一気に26位に下落した事態である。伝統的沖縄料理、即ち、茹でて脂を落とした豚肉の活用、その茹で汁や昆布のうまみ成分を使った味つけによる少ない塩分摂取、イソフラボンを豊富に含む豆腐、そして食物繊維やビタミン類の豊富な海藻・ゴーヤなどの緑黄色野菜をよく摂っていた食生活が、アメリカの統治下、ステーキやハンバーグなど動物性脂肪、塩分を多く摂る生活に変わったため、その時期に成長した人々が壮年期になって心血管疾患を発症し死亡者が増加したことが『沖縄26ショック』の原因といわれている。

1850年ごろ発行された『為御菜』なるおかずの相撲番付見立てでは、西方・精進方大関には「八杯豆腐（湯豆腐の様なもの)」、関脇は「昆布油揚げ」、前頭に「焼き豆腐のすまし汁」や「ひじき白あい（ひじきの煮物と砕いた豆腐の和え物)」が載っており、豆腐、海草といった沖縄の伝統料理との類似に驚く。ちなみに東方は魚類方で大関は「目刺し　鰯」、ご存知、多価不飽和脂肪酸EPA、DHAを多く含む「身体にいい」魚である。

もっとも、ビタミンＢ１欠乏による衝心脚気や虫垂炎で命を落とした（虫垂炎の手術が普及したのは1905年以降とか）江戸時代の人々の平均寿命が現代より遥かに短かかったのは周知の通りだ。

欧米的合理主義、それに基づくいわゆる「進歩」が我々の生活を便利にしたことは間違いない。しかし、あちらの神様が6日間働いて7日目にお休みになられたことに由来するという「1週間」なるリズムが、時に追われる生活の元になっていもしまいか。初午、藪入り、節句、盆、正月といった節目に休む年単位のリズムで季節に自然に寄り添うように暮らしていた江戸時代のわが国の人々の生活感覚を想像するとそんな気がしてくる。

「重要なことは役所、クニがやるべきだ、などという発想自体がなく、自分にとって重要なことであればあるほど、自分たちで自治的に運営するのが当たり前という感覚だった」

石川英輔／田中優子『大江戸ボランティア事情』（講談社文庫）

ご一新のせいか進駐軍のせいか、「暗い過去」とは決別し、明るい欧米式未来を望もう、という「進歩信仰」が当然だった時代もある。しかし今は大分陰ってきただろう。学術が進歩し、分かってみたら昔の知恵が正しかった、そこに「単純な進歩信仰では立ち行かない」という「学ぶべきもの」があるのではないか。新しい眼で古きを訪ね、自らの生活を委ねる習慣、生活の様式を自らで胆に据える、今が正念場ではないかという気がする。

たとえば同窓会。同じ学舎である年数同じ師について学んだ者たちが交誼を通ずることは無意味だろうか。その精神に酌むべきものはあるにしても、個人情報保護法なる新法を盾に、人の稼ぎの上前を掠め取ろうというマンション屋の電話が小うるさいからと、真の財産とも言うべき同窓生のつながりの元、同窓会名簿をものの役に立たないものにしてしまうのが「止むを得ないこと」だろうか。

本会会員も数千を数えるようになってきた。『学級会的運営』では立ち行かないのは前回も申し述べた通りだ。本会が真の全国組織として確固たる地歩を築くことが望まれる。そのために、前回の総会で議論された理事の選出や任期の問題を可及的速やかに解決し、より多くの同窓生諸氏が本会運営に参画するような機構を整備すること、その基盤ともなる全国各地の同窓生諸氏による支部活動の興隆が強く望まれる。名簿の問題もそうした中で種々議論され、新たな形になっていくだろう。本会の存続と発展にむけ、諸氏の叡智を集める、こちらも今が正念場のように思う。

2007年10月21日
第28回栃木市健康まつり
市民公開講座（高座？）
春風亭柏枝師匠（栃木高校の同級生）、斎藤栃木市医師会長との対談にのぞむ筆者
師匠の『初天神』をうかがった後、『今の子供、昔の子供』と題して、疾患、栄養、教育、暮らしぶりなど、多彩な話題を語り合った。
（協力：栃木落語の会・八重桜の会）